色彩学　第1巻　第1号　2022年　46－49

追悼文

馬場先生を偲んで

In Memory of Goro Baba

大住 雅之（株式会社 オフィス・カラーサイエンス）

私が馬場先生のご逝去を知ったのは，大変不甲斐無いことですが，年末の1枚の喪中のご挨拶の葉書からでした．この為，追悼文を寄せるに際し，ご逝去から今に至るまで，時間が経過してしまった事を，深くお詫び申し上げます．また，私ごときが馬場先生の追悼文を認めることをお許し頂きたく，重ねてお願い申し上げます．

馬場先生は昨年の八月に，肺炎により九十一歳の生涯を閉じられました．コロナ禍になる少し以前まで，自宅から顧問先の村上色彩技術研究所のある勝鬨橋まで通っていらっしゃいましたので，訃報を知った時には，残念な気持ちで一杯でした．私が馬場先生を初めて知ったのは，今から25年ほど前になります．当時，日本色彩学会に入会して間もないころで，私はコンピュータ・カラーマッチングシステム（Computer Color Matching System CCM）の研究開発を行っていました．馬場先生は当時，村上色彩技術研究所の顧問を務めていらっしゃったと思います．CCMは，分光光度計等の測色装置との連携が第一で，用途にあった測定方法や光学系の開発・選択が重要です．そうした接点から，学会でご一緒する機会が増えていったのだと思います．さて，馬場先生のご活躍ですが，これは私が生まれるはるか前に遡って，お伝えする事になります．

馬場先生のご略歴

馬場先生は昭和4年12月9日にお生まれになり，昭和29年3月に東京大学工学部をご卒業されました．大学在学中より色彩表示及び計測を志し，ご卒業と同時に日本電子測器㈱色彩部に入社されました．予てより色彩部の責任者である故村上静男氏とともに研究され，入社後は特に標準色票系の確立に従事されました．その後，昭和31年に同氏とともに㈱村上色彩技術研究所を設立され，工業的に応用可能な標準色票の作成，色・光沢等の視感に関係する物体表面の性質を測定する装置の開発，建築物内・外装の色彩調節のための計測等，非常に多くの研究に取り組まれました．その成果の一部は，1969年の第1回国際色彩学会にて発表されました．

受勲された時のご様子．村上色彩技術研究所の祝賀会にて．

その後，昭和46年より，日立製作所那珂工場及び日立那珂精器㈱において，見えに関係する分光測光器の開発設計に当たり，測色用分光測光器，蛍光測定用分光測光器，医用分光測光器の製品化を行われました．

昭和63年より再び村上色彩技術研究所に戻られ，顧問として測定装置の設計・製作に当り，その成果の一部は，1989年第9回国際色彩学会に，変角分光測色によるパールマイカ色の評価として発表されました．色表示の標準化に関連し，色に関する工業標準の制定には昭和50年代より積極的に参加され，以後，表色，測色に関する殆どの日本工業規格の原案作成，制定の審議に関与されています．そして平成5年には工業標準化の功績によって，通商産業大臣賞を受賞されました．

馬場先生は，一方で国際的なご活躍として，国際照明委員会（CIE）の活動に参加し，昭和50年より，CIE-TC 2.3（材料の特性）技術委員会の委員として測定法その他の立案に加わり，その成果は，CIE出版物

No.38「材料の光学特性測定法」，No. 44「絶対反射率測定法」，No.76「蛍光試料のラジアンスファクタの測定方法」として刊行され，それらに対して，1995年第11回大会において，CIE表彰を受けられました．

そしてこれらの業績と，特に安全色に関する標準化の功績から平成14年に，勲五等双光旭日章を受勲されています．

日本色彩学会に於けるご功績

ご存知の方も多いと思いますが，日本色彩学会に対する功績も多大なるものがあり，とても一つ一つを記載しつくせない程の量となり，この本文の中で賄うことは不可能なほどです．まず，大まかな流れをご紹介しますと，1990年から2年間，副会長と関東支部長を兼務されました．また1995年には名誉会員に，2002年には日本色彩学会賞を受賞されています．然しながら最も申し上げたい事は，各種委員会に対する多すぎるほどの貢献です．1990年の学会誌査読委員に始まり，論文賞審査委員会，JIS原案作成委員会，研究活動推進委員会，論文賞審査委員会，論文奨励賞審査委員会等の多くの委員会の委員長を歴任されています．またJISに関する委員会はもとより，測色研究会，白色度研究会，安全色研究会の設立当初より，主査を務められました．

馬場先生との思いで

冒頭に書きましたように，私が馬場先生を存じ上げている期間は，凡そ25年程になります．その間の日本色彩学会を始めとする，委員会活動等の思い出をお伝えしたいと思います．

・学会研究発表会でのご様子

日本色彩学会の研究発表会での馬場先生のご様子をご存知の方も，段々と少なくなってきたのではと思います．まず，私の馬場先生の最初の印象は，発表会の時の質疑にありました．関係する研究発表では相手に対して容赦無し，登壇者が発表を終え，真っ先に手をあげられるのは馬場先生．そしてご指名を受けると，例外なく会場内には緊張が走りました．相手が村上色彩技術研究所製の計測機器を使用されているユーザーであってもお構いなし，特に用語の使用方法や定義には，大変厳しくご指導されていました．背景にあるのは，JISやISO，CIEといった規格に関するお仕事を，自主的に行ってこられたこと，規格に対して揺るぎない信念をお持ちの上での人生を送られてきたことがあったからと思います．初めて馬場先生の質問の様子を見た時，当時，結構な若手だったのですが，これはえらい大変な学会に入会したものだと，発表前には用語の定義について，真剣にチェックした事を思い出します．

・ISO SC9 WG22

ISOのSubcommittee No. 9は，塗料の試験方法に関するもので，その中のWorking Group No. 22は，特に光学特性の試験方法を取り扱うもので，色彩に関連する多くの規格を審議する場でした．馬場先生と共に日本塗料検査協会の故吉田豊彦先生からもお誘いがあり，このグループの委員としてお仕事をご一緒しました．この時の驚きは今でもはっきりと覚えていますが，兎に角，規格間の細かい番号と，その関係性や経緯について，はっきりと頭の中に整理されていらっしゃっていて，JIS，ISO，CIE，ASTMに至るまで，立て板に水とはまさにこの事と言わんばかりに，次から次へと言葉があふれ出ていました．委員会からの帰り道，僅かな時間でしたが，会合に参加された方々と電車でご一緒する間，必ずといってよいほど馬場先生の話題となり，規格に関する知識と経験は本当に只者ではない，というのが全員の一致した見解でした．このWG22の会合は，当時の私にとって未知の話ばかりで，いかなる講義でも得られない，貴重な経験の一つです．

・ASTM

前述のWG22でご一緒して暫くの後，私は18年間勤めた会社を退職して，起業しました．2004年の事です．その後も変わらず，お付き合い頂いたのですが，ASTMのメンバーにどうかと，誘われました．ASTMは，American Society for Testing and Materialsの略称で，日本のJISに相当する機関と考えて頂ければと思います．ASTMでは，自国内だけではなく，広くメンバーを海外からも募集しており，多くの国から寄せられた意見に基づいて，規格の審議が成されます．馬場先生からはASTMが一番早く審議され，ここに参加するのが最も価値が高いと説明されました．メンバーになる為には，メンバーのどなたかから推薦され，更に審議により認められる必要があります．馬場先生に推薦人になって頂き，米国で委員会に参加するようになりましたが，当時DupontのAllan Rodriguesさんらとお知り合いになれたのが何よりでした．ある

時，何故私を推薦されたのか，お伺いしたところ，「君ぐらいしか遠い米国まで自費で参加してくれそうな人はいないよ.」というお話でした．なるほど確かに私は，個人の会社の経営者ですし，予算の配慮は自在に出来ます．しかし馬場先生の場合，ASTMはもとよりCIEやAICといった多くの国際会議に独自に出席されていらっしゃって，定年後もその多くは自費による参加でした．全く頭の下がる思いです．

さてASTMでは，忘れられないシーンがあります．それはいずれの海外の方々も，とても尊敬の念を持って馬場先生に接していらっしゃったことです．理由は80歳を過ぎてなお，自費で遠い米国の委員会に出席されていることも有るでしょう．しかし，その鋭く的確な指摘やコメント，そして委員会の中で行われた研究発表は，会場の皆様に大変，大きな影響を与えてこられたのだと思います．これ程信頼される日本人がいるのだろうかと，正直，驚きました．また私が参加していたころ，ゴニオ計測に於ける表記方法についての話題があり，X-Rite社の変角分光測定機器が市場に出回っていた当時は，正反射方向を基準にしたA-specula方式が全盛でした．しかしこの方法では，より複雑な入射・受光の幾何条件では対処が難しくなるからと，当初より試料面に対して垂直方向を基準とするA-normal方式を提唱されていて，セミナーや会議等で事あるごとにこの方式を説明されていました．やがてASTMでもA-normal方式が規格化され，日本からの意見が反映されたことを思い出します．

・九州色彩ネットワークへのご参加

2004年に起業していらい，私の当学会での活動の場は，地元である熊本に移りました．以来，暫くは当時，関西支部の元にあった九州色彩ネットワークで活動していました．2005年の事ですが，研究発表会を熊本で開催することになり，私は実行委員長だったのですが，わざわざ熊本まで発表にいらっしゃって頂いた事を思い出します．東京からのエントリーで，ローカルな発表会にご参加下さり，大変，有難く思いました．この研究発表会は高校生による発表参加もあり，盛況の中で会を全うできたことは何よりでした．

・測色研究会

馬場先生と測色研究会の関わりは大変古く，先生は1991年から2009年の間，20年近く主査を務められました．測色研究会は日本色材協会との共同開催で，吉田豊彦先生が色材協会側の主査で，このお二人で運営をされて来ました．主に測色に関するメーカー間の連携を取り持たれていらっしゃっていて，業界全体を常に視野に入れ，非常に達観されておられました．測色研究会では主にセミナーを主体とした活動を行っていて，馬場先生ご自身がお話になるケースも多かったと思います．2010年以降は，私が馬場先生に代わり主査を務めておりますが，同時に吉田先生は武井先生に引き継がれ，世代交代となりました．2年間はセミナーを主体とした活動でしたが，2012年からは，研究発表会に活動の範囲を広げました．当時は，ちょうど学会の中で，研究会のあり方について，研究発表会を行う研究会と，セミナーを主体とする専門部会に分けることが検討されていて，馬場先生からはセミナー主体が無難だとアドバイスされましたが，私は思い切って研究発表会に舵を切りました．結果は現在に至るまである程度の成果があったのではないかと思いますが，先生には長い間，研究会にご参加頂き，時にはパネラーとしてご登壇頂いたり，また時にはコメンテーターとして発表後の質問の中でお話したりして頂きました．今，馬場先生がお亡くなりになられた事を思いますと，とても寂しい限りです．

2012年の測色研究会にて．パネルディスカッションで発表されているご様子．この時は今後の測色システムのあり方がテーマであった．

晩年の馬場先生

お年を召されても，いつまでも精力的に活動されるというイメージしか私の中にはありません．何か事あ

るごとに，先生からはちょっと相談したいことがあるからと呼び出しがかかります．相談の場所は決まっていて，村上色彩技術研究所の4階にある，馬場先生のお部屋です．中に入ると机の上には沢山の資料が積みあがっていて，壁は煙草の煙で茶色く変色しているお部屋ですが，そこには馬場先生との思い出が沢山あります．特に海外の規格では，日本のJISとの整合性を留意されておられて，あるべき論を滔々と私に言い聞かせてくれました．また研究会活動では，白色度研究会に対してもよくフォローされていて，当時主査であった内田先生と何度かご一緒したことがあります．規格や研究会関係以外でも，ビジネスの上で協力して頂いた事が何度か有り，ドイツのMerck社に，GCMS-4型分光光度計を販売する際には，担当の研究者が来日した時に，丁寧に機器の特徴をご説明頂きました．また，私が2017年の全国大会で，マンセル生誕100周年記念の特別講演を行う際にも，戦後間もないころのお話しをお聞きする事ができました．特に講演の内容に，日立の分光光度計が登場しますので，先生のご経験談は，とても貴重な話となりました．そして生前の最後にお会いした話では，光沢関係の測定標準化に関する事で，水銀ランプの使用の重要性を説かれ，ASTMで説得してくるように言われたのですが，それが全く実現できなかったことが，今となっては大きな後悔として残っています．お話の後は，帰り道にあるファミリーレストランで，二人して真っ昼間からビールを頂くのが決まりでした．お誘いは有無を言わせずという感じで，後を付いていくしか無いのですが，思えばASTMで滞在中のホテルでも，会議が終わればバーで一杯というのがお決まりで，私はお酒には大変弱いのですが，よくご一緒させて頂きました．そしておつまみはいつも馬場先生のお話でした．因みに村上色彩技術研究所の鈴木氏によると，馬場先生は職場では，「成人してからは，夜はコメを食べたことが無い．コメは飲み物です．」と仰っていたそうです．

さて，最後にお話ししたいことは，馬場先生程の人物は当面現れ得ないだろうという事です．知識や経験だけではありません．馬場先生を語る上で最も重要なことは，何事も当たり前のようにやってのける行動力と，それを支える判断力，そして決断力に有ると思います．常にグローバルな視野に立って行動され，そして隅々まで注意を払う丁寧さは，他の方の追従を許さない存在でした．そして何よりも献身的であったと思います．また，時間の使われ方も大変，お上手でした．今では研究発表会で，厳しくご質問される姿がとても懐かしく，今日，このような方がおられないという事が，却って寂しい思いを助長します．今の自分を振り返ると，とても馬場先生の業績に叶う仕事は全くできておらず，この点は反省する事しかありません．しかし召されても尚，私達を見守って頂きたいのが，正直な気持ちです．